

2020年3月11日発行

テキスタイルにおける表現の多様性

牛 尾 卓 巳

相模女子大学紀要 VOL.83 (2019年度)

テキスタイルにおける表現の多様性

牛 尾 卓 巳

Textiles as a Medium for Artistic Expression

Takumi USHIO

Abstract : In our daily life, textiles are used for various applications, such as apparel and furnishing. Since the 1960s, people around the world have been exploring fiber and yarn as a medium for artistic expression, seeing newfound possibilities beyond the scope of our daily life. This was particularly evident at the International Tapestry Biennale, an art event first held in Lausanne, Switzerland in 1962. As the Biennale evolved, people began to create sculptures out of tapestries, exploring the three-dimensional qualities of their designs. The term “fiber art” or “textile art” is used to describe such works, which has become a world-wide movement.

This paper will discuss fiber and yarn as a medium for artistic expression, focusing on “Asia-Europe 4,” which is an international textile exhibition that took place in 2019. It will also discuss the author’s own work which was on exhibit, identify the materials and techniques used in the creation, and describe its relationship with artistic expression.

Key Words : textile, fiber, wool, felt making, shibori

1. はじめに

私たちは常に布に囲まれて生活している。布は私たちにとって無くてはならない存在であり、日々の暮らしに彩りと豊かさを与えてくれる大切なものである。有史以前から人は気候の変化や外敵から身を守るため布を身に纏い、住居の材料として使用してきた。採取した植物を使って布が作られるようになったが、色の異なる植物を選び分け組み合わせる模様を作っていた例が原始文明期のマットなどに見られる。これは機能性のみでなく装飾性を意識した美に対する探究心の表れ¹であるといえる。この頃から人は布を介した表現を始めていた。

現在、衣料やインテリアファブリックなど機能性、装飾性を求めた様々なテキスタイルが日々生み出されている。一方でその生活における布の用途を越え、表現の可能性を追求した取り組みが1960年代から現在に至るまで世界各地で行われてきた。1962年にスイス・ローザンヌで第1回国際タペストリービエンナーレ²が開催された。当初はオーソドックスなゴブラン織りによるタペストリーが並んだが、回を追うごとに平面であったタペストリーから次第にレリーフ状になり、そして彫刻的な立体作品へと表現形態の幅が広がった。それは「タペストリー」の枠に収まらず「ファイバーアート」や「テキスタイルアート」と呼ばれるようになり、世界的なムーブメ

ントとして新しい表現が次々と生まれた。その後、現在まで多くの展覧会が開催されてきた。2019年には「Miniartextil Como 2019³」、「第16回国際タペストリートリエンナーレ⁴」、「第5回Textile Art of Today⁵」、「第8回 Biennial of Contemporary Textile Art⁶」、「Asia-Europe 4」などがヨーロッパ各地で開催された。

この中で私が参加した展覧会のひとつ「Asia-Europe 4」を取り上げ、そこに見られるテキスタイル表現の多様性について考察する。また私自身の出品作品についてもここで振り返る。

2. Asia-Europe 4

「Asia-Europe」展はアジア、ヨーロッパの現代テキスタイル作家による作品を世界に発信する展覧会である⁷。2011年に第1回展が開催され2019年で4回目となる。「Asia-Europe 4」と題された第4回展はベルギー・ブリュッセル在住のMarika Szarazによって企画された。日本、韓国、中国のアジア3カ国から18名、フランス、ラトビア、デンマーク、ドイツ、ベルギー、イタリア、ポーランド、ハンガリー、リトアニア、フィンランド、スロバキア、スペインなどのヨーロッパ諸国から18名、計36名の作家が作品審査により選出され参加している。2019年3月1日から4月28日までベルギー・トゥルナーのMusée de la Tapisserie、5月17日から8月18日までドイツ・クレーフェルトのDeutsches Textilmuseum Krefeld、そして年をまたいで2020年4月19日から6月7日までデンマーク・ドロニングルンドのDronninglund Kunstcenter、9月11日から11月7日までリトアニア・ケダイネイのJaninos Monkutės-Marks muziejus、この4カ国4会場で開催される。

私は2019年8月にリサーチを兼ね、出品者としてドイツ展の会場を訪れた。ドイツ展が開催されたクレーフェルトはデュッセルドルフから約20kmに位置するドイツ西部の街である。この街は18世紀から織物産業とりわけ絹織物、ジャカード、ベルベットで栄え、地元のギャラリーには古くからのジャカード織機、紋紙、意匠紙、織物サンプルなど貴重な資料が残されており、その歴史をうかがい知ることができる。

展示会場となったDeutsches Textilmuseum Krefeldはテキスタイルやファッションに関する企画展を数多く開催している美術館で、街の産業である織物をはじめテキスタイルに関連する国内外の資料を約30,000点収蔵している。会場には1階と2階の展示スペースがあり、中央の吹き抜けによって一つの空間として繋がっている。その吹き抜けを含む展示スペースに平面、立体、インスタレーションなど様々な形態のテキスタイル作品が展示された。それぞれの作家が追求してきた36の技法、素材による表現が会場を彩った。(図1)



図1-1:「Asia-Europe 4」インビテーション



図1-2:「Asia-Europe 4」ドイツ展の会場となったDeutsches Textilmuseum Krefeld



図1-3：会場風景

3. テキスタイルとは？

テキスタイルとは何かをここで考えてみる。「textile」という単語をそのまま訳すと「織物」、「布地」という意味である。織物とは糸をタテ、ヨコに組織させる織りの手法により作られた布地の事を言う。織物を構成するのは糸であり、糸は繊維から成る。繊維を並べて一方向に捻ることによりその強度は増し、捻り合せることによりさらに強くなる。繊維そのものだと短い素材がこのようにして紡ぐことにより繋がり糸となる。織機に糸を張り緯糸を織り込むことにより織物が作られる。

テキスタイルを織物に限定しないで糸または繊維を構造的に組み合わせて布を作る方法と広く捉えると、編む、結ぶなども含まれる。また繊維を糸にすることなく直接布を作る不織布の手法としてフェルトがある。布を「繊維から作られた面状のもの」と置き換えるなら植物繊維から作られる紙もこの範疇に含んで良いのではないかと個人的に考える。これらの繊維による造作は「inter lacing」または「fiber structure」と呼ばれているもので、繊維状素材の構造技法全般を指す⁸。

このように本来の意味を越え、糸や繊維状素材など「線」の要素を「織る」、「編む」、「組む」、「結ぶ」、「巻く」、「絡ませる」など何らかの手法をもって構造的に組み合わせたもの全般をテキスタイルと捉えることができる。さらにそこに染色や、加工を施したものの、空間、身体、時間など様々な要素が加わり今日のテキスタイル表現となっている。

4. 糸、繊維による多彩な表現

「Asia-Europe 4」展に出品された作品は織物、編物、フェルト、そのほか糸や繊維状素材を中心とした様々な素材と技法により表現されている。

石井香久子の作品「Japanese paper strings — Musubu + Tsunagu」は水引を材料にしている。水引は和紙を縫い紐状にしたものに水糊を引いたもので、冠婚葬祭での贈答品の包み紙などにかける帯紐であり、日本の伝統的な意味合いが含まれている。結ぶというシンプルな行為の繰り返しにより繋ぎ合わされた線の集合体は、水引の本来の意味合いから離れある種の植物のようにも見える。(図2)



図2：石井香久子の作品「Japanese paper strings — Musubu + Tsunagu」(部分)

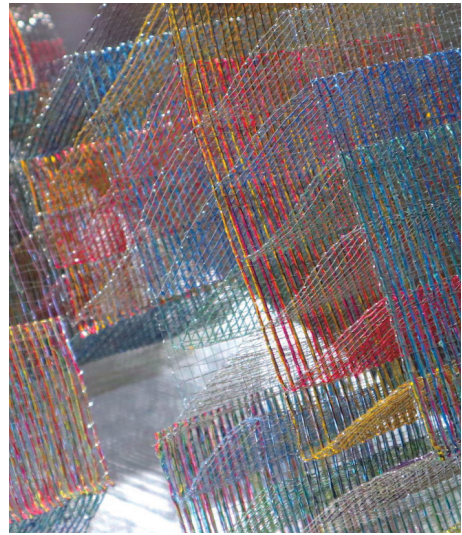


図3：渡邊三奈子の作品「A shower of lights」(部分)

渡邊三奈子の作品「A shower of lights」は多層織による立体作品である。鮮やかな色に染められた絹糸とステンレスの糸で多層に織られた構造的な織物は、プリズムを通して現れる虹色のように彩度を落とさないまま重なり合い鮮やかな色彩効果を表している。(図3)

ドイツのElsbet wiensは「Big snail」、「Passage」、「Double peak」の3点を発表した。針と糸のみによりレースを編むニードルレースの技法による作品だが、糸の代わりに銅線と錆びさせた鉄線を使用している。リズムカルに描き出されたワイヤーによる線の重なりは、ある形状を描きつつも実体感のない虚ろな存在を顕在化させているようでもある。

ラトビアの作家Antra Augustinovicaは新聞紙を材料に用いている。新聞紙は材質を見れば植物繊維から作られた紙であるが、文字情報がプリントされた瞬間に日々の情報を人々に届ける情報媒体へと変化する。コイリングにより凝縮された新聞紙は情報の塊になる。これを糸で繋げて立体に形づくっている。「Ancient town」と題された作品は情報のうねりに飲み込まれた街のようにも見える。

中国のFan Wuの作品「Solar terms series」は綿ロープを針金に巻くラッピングの技法による壁面作品である。綿ロープという線の要素を支持体である針金に三次元的に巻き重ねていきさらに線の要素

としている。これで描いた葉や蔓などの植物を思わせる形状が作品全体を覆っている。幾重にも広がる有機的な動きのある構成により作品全体から蠢くような生命の営みを感じ取れる。彩色していないからこそ、この線の動きが強調されている。

俎徠友香子の作品「Liquid space」はウールの原毛から作られるフェルトによるレリーフ作品である。ウールは水分と圧力を与えると縮絨されフェルト化するという性質がある。ウールをレイヤー状に重ねフェルト化した後にカットし、その断面を見せている。シルクの生地を層の間に挟み込むことにより素材と色彩の豊かさを増している。(図4)

弥永保子の「From southern island」は絞り染めの技法により海や雲など自然の色や形を表現している。シルクオーガンジーによる染色の鮮明さと素材の透過性により移りゆく自然の色彩を感じる。染色による色彩表現のみでなく絞りにより布に固定される形状を造形の要素として用いている。(図5)



図4：徂徠友香子の作品「Liquid space」(部分)



図5：弥永保子の作品「From southern island」(部分)

1階展示室の中央に配置された韓国のSui Parkの作品は増殖する泡のような有機形状の立体作品である。彼女は配線などを束ねる用途で日常的に使用されるケーブルタイを作品の材料としている。繊維、糸などといった一般的なテキスタイルの素材ではなく既に形づくられた工業製品を用いる。ケーブルタイの持つ束ねる機能をそのまま利用し、お互いを繋ぎ合わせていく。その見慣れた工業製品が構造的に造形されたものは全く別の性格を持つものに姿を変えている。「Sprout」と名付けられた今回の作品は成長をテーマにしている。植物の新芽からインスピレーションを得ているが、それは写実的にその姿を捉えたものではなく、より広い解釈での「成長」をテーマとしている。

5. ウールの性質を生かした造形

・縮絨によるテクスチュア

私は今回の展覧会に「Red sun」と題した立体作品を出品した。これは生命の誕生と生命活動の源である太陽を重ねて表現した作品である。(図6)

この作品では二つの技法を組み合わせるオリジナルのテキスタイルを創作した。その技法の一つは「フェルト」、もう一つは「絞り」である。

フェルトはウールに備わっている天然の作用を利用した技法である。ウール繊維は雨のような水滴ははじくが、水蒸気のような気体は通過させ内部に浸透させるといった性質を持っている。このように繊維

自体が呼吸をするかのように吸湿、放湿を繰り返し湿度を一定に保つ働きをする。これはウール繊維を覆っているスケールと呼ばれるウロコ状の表層の働きによるもので、湿潤すると開く性質を持っている。フェルトはこのような繊維の働きを利用したもので、水分を含ませ圧力を与えるとスケールが開いた状態で移動し繊維同士が絡み合いフェルトになる⁹。この働きを縮絨という。特に道具を必要とせず、水分と手の力だけでも布を作ることができ、さらに平面から立体まで自在に形づることができる。初めてフェルト技法に触れたのは大学在学時であったが、このフェルトの自由な造形とプリミティブで暖かい質感に強く惹かれ、また自然の作用による素材の変容性に可能性を見出した。

ウールのみで作るフェルト以外に異素材との組み合わせによるテクスチュア研究として、ウールの原毛に様々な種類の生地を合わせたフェルトづくりを試みた。生地に原毛を絡ませる、縫い付けるなどの方法で一体とし縮絨する。ウールは縮絨により縮むが一方の生地は縮まない。この収縮率の差により生地に複雑な皺のテクスチュアが生じる。これは生地の厚さや、糸の太さ、織り方、密度、また素材の種類により異なる表情をみせる(図7)。さらに生地にあらかじめステッチを施して縮絨する。こうしてできたテキスタイルはある種の樹皮や皮膚のようにも見える。繊維や糸だった素材が新たな意味を持つものに姿を変える、この変容性はテキスタイル表現においての重要な要素のひとつである。

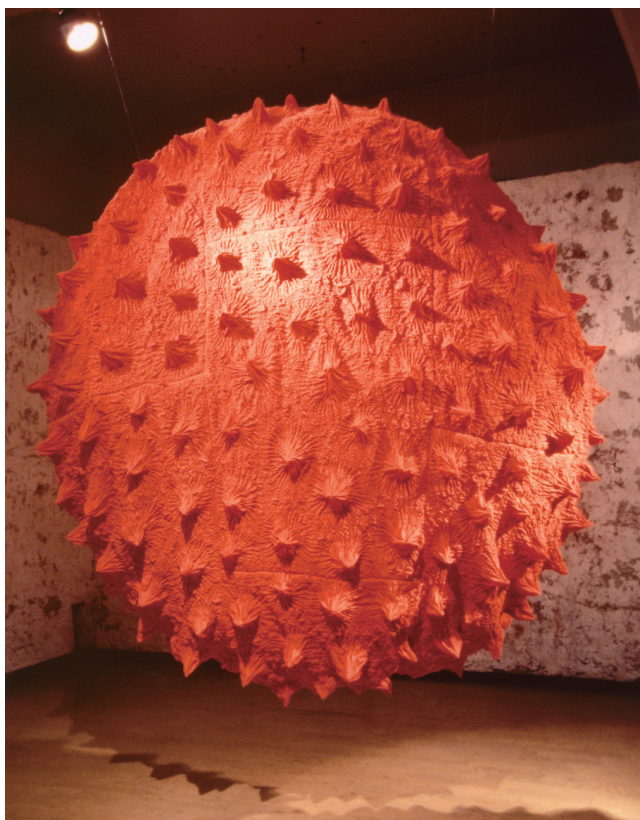


図6-1：「Red sun」170×170×50（cm）綿、ウール



図6-2：「Asia-Europe 4」Deutsches Textilmuseum Krefeldでの展示風景。会場中央吹き抜けの2階の高さに展示された著者の作品。

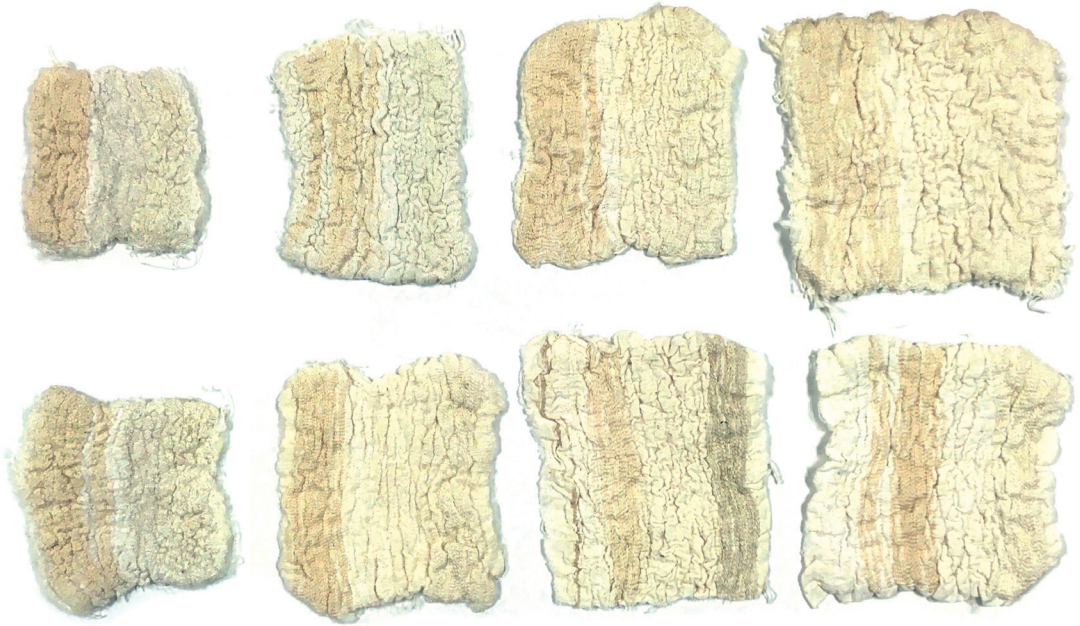


図7-1：ウールと生地を合わせて縮絨したサンプル

糸の太さ、密度の異なる生地にそれぞれ綿糸、麻糸でステッチを入れ原毛と合わせて縮絨した。生地の種類によって表面に現れるテクスチャも様々である。

• 絞りによる形状記憶

日本における絞り染めは奈良時代に中国から伝播したといわれており、天平の三纈（夾纈、臈纈、纈纈）の一つ纈纈にあたる。染液が入らないように布を糸で括る、縫い締めるなどにより防染し文様を染め出す技法である¹⁰。世界各地に絞り染めは存在するが日本は他の国に比べてその種類が特に多く100種類にも及ぶ多種多様な技法がある。多彩な日本の絞りは今や「Shibori」として世界共通の言語になっている。絞り染めは模様を染め出すのみでなく、絞りの作り出す形状にも面白さがある。布に絞りを施し、水分や熱を与え乾燥させることによってその形状がそのまま布に記憶される。しかしこれは素材により大きく差があり、形状保持のためには適切な生地を選定が必要である。

• 研究過程での発見

絞りの技法を研究する過程で「蠟纈絞り」という技法に出会った。この技法は布を縫い締めるまでは通常の絞り染めと同じであるが、絞った布をそのまま染色するのではなく防染のためロウ溶液に浸すのである。生地にロウを染み込ませたあと括り糸を解くと絞った部分が生地そのまま現れる。そこへ染料で



図7-2：ステッチを施した生地とウールの原毛を合わせて縮絨

色を挿し、ロウを落とすと通常の絞り染とは逆のネガポジの関係になる。これが蠟纈絞りである¹¹。この技法で私が注目したのは完成した作品ではなく、その制作過程での布の状態である。絞りを施しロウを含ませたその布は絞りの形状を残したまま乳白色にコーティングされ全く別の表情を見せていた。それは布のテクスチャとしても造形としても新鮮に感じられた。



図8：絞り染めの技法と縮絨を合わせたテクスチャ 左から根巻き絞り、豆絞り、巻き縫い絞り

・フェルト+絞り

蠟纈絞りでの体験から着想を得て、ウールの生地
に縫い絞りを施し縮絨を試みた。すると縮絨による
縮みとウールの可塑性により綿や絹など他の素材で
は出来ない絞りの表現が生まれた。「根巻き絞り」、
「豆絞り」、「巻き縫い絞り」など日本の多彩な絞り
技法を取り入れることにより個性豊かな造形になる。
(図8)

これらの研究を経て、今回の出品作品ではウール
と綿の生地をミシンによって縫い合わせ、同時に絞
りを施し縮絨する複合的な手法を採っている。縫い
とめる部分と縫わずに浮かせる部分を設けること
により縮絨後に隆起して現れるレリーフ形状をコン
トロールし、テクスチャをデザインすることができ
る。絞りを施す部分は突起させるために縫いとめず
浮かしておく。これにより縮絨後、絞った部分は生
地のゆとりの分だけ突出する。こうして表面に棘の
ような放射状の突起を造形した。この表情は作品の
コンセプトである生命の誕生、源を表現するのにふ
さわしいテキスタイルになった。(図9)

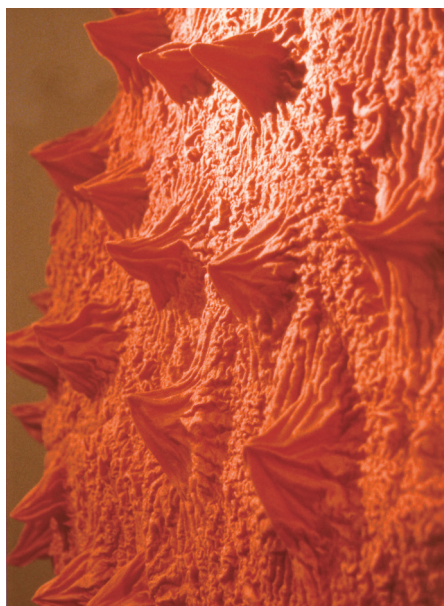


図9：今回採用した絞りとウールの縮絨によるテキスタイル

の歴史や文化がテキスタイルの技法、素材を通して
見えてくる。

一本の繊維を画用紙の上の鉛筆の線に置き換えて
考えるとタテ、ヨコの線だけでなく直線、曲線、あ
らゆる線を重ねて描ける。その線を太くしたり細く
したり、また色鉛筆に持ち替えてみると色を変える
ことができる。またクレヨンや毛筆に変えると線の
表情自体が変わる。こうして思うままに線を描いて
いける。線の集まりがやがて面になり布は出来上が

6. おわりに

「Asia-Europe 4」展で見られた作品の数々はテ
キスタイルを「繊維状素材による造形」とする解釈
のもと、どのような素材でどのように構成するか、
どのように自分の思い描くテーマに近づけていくか、
作家それぞれが自らの風土で培ったアイデンティ
ティと思想のもと答えを出している。作家の育った国

る。実際には布は三次元の構造体であるためこの構成の仕方と使用する素材によって視覚的な効果のみでなく触覚的な効果も加わることになる。さらに素材の持っている性質を生かした加工、技法が加わり、作り手のコンセプトが加わると可能性は無限に広がっていく。これを考えるとテキスタイルの未来に怖いものはないように思う。

本稿で記述したウールの縮絨の展開として、原毛による手法のみでなく近年は糸による縮絨の研究を進めている。つまり織りの技法によるテクスチュアの研究である。経糸、緯糸の並びやウールとその他の素材の混合率、織物組織の計画により現れる表情には大きな差がある。その発表の場として2020年3月に個展を開催予定である。その成果発表についてはまた機会をみてまとめたい。

注

¹ 世界の染織史—先史時代から20世紀のファイバーアートへ— (抜粋)
シャーリー・E・ヘルド著 中野恵美子訳 中野恵美子 2018年 6頁

² 国際タペストリービエンナーレ
1962年から1995年までスイス・ローザンヌで開催された国際展。当初はゴブラン織りによる織物という条件であったが3回目からはその条件は取り払われ、繊維素材による自由な造形表現の場となった。1995年の第16回展を最後に幕を閉じた。

³ Miniartextil Como
イタリア、コモで1991年から毎年開催されているテキスタイルアートの展覧会。招待作家とミニチュールのコンペ部門で構成される。

⁴ 国際タペストリートリエンナーレ
1972年から続く世界で最も歴史のあるテキスタイルアートの国際公募展。ポーランドのウッチ中央織物博物館により開催され2019年で16回を迎える。2019年のテーマは「Breaching Borders」。

⁵ Textile Art of Today
2006年から3年ごとに開催されている中央ヨーロッパV4 諸国 (スロバキア、チェコ、ポーランド、ハンガリー) によるテキスタイルアートの国際的なプロジェクト。世界各国から作品を広く募っている。第5回展では世界49カ国から約1000点もの応募があ

り、著者はExcellent Awardを受賞した。2018年～2019年に渡りスロバキア、チェコ、ポーランド、ハンガリーを巡回。

⁶ Biennial of Contemporary Textile Art
今回で8回目を迎える国際的なテキスタイルアートの展覧会。これまでベネズエラ、コスタリカ、アルゼンチン、メキシコ、ウルグアイで開催され、第8回展は「Sustainable City」をコンセプトに掲げスペイン・マドリッドで開催される。

⁷ 「Asia-Europe」展Facebook
<https://ja-jp.facebook.com/asiaeurope.fiberart/>

⁸ 「染色論のすゝめ」
福本繁樹 工芸教育研究会 2016年 42頁

⁹ 「フェルトメイキング ウールマジック」
ジョリー・ジョンソン 青幻舎1999年 78頁

¹⁰ 「絞り染め大全」
安藤宏子 誠文堂新光社 2013年 154頁

¹¹ 「蠟纈絞りの世界—作品とその技法—」
岩田雅代 染織と生活社 1989年 40頁